

新年のご挨拶

和歌山県農業協同組合連合会
代表理事理事長 梶本 毅樹



新年明けましておめでとうございます。皆様方には恙なく新年をお迎えることとお慶び申し上げます。

平成 28 年の正月三が日は、季節はずれの暖かさで始まりました。しかし、1 月後半には一変して冬型の気圧配置が強まり、鹿児島県奄美大島で 115 年ぶりに雪が降り、沖縄本島でも観測史上はじめてになるみぞれを観測するなど厳しい寒さとなりました。その後は、東日本で観測史上最も早い雪解けとなるなど、極端な気象を繰り返しながら暖冬傾向で春を迎え、7 月半ばからは最低気温 25℃ 以上の日が 39 日間もつづく暑い夏となりました。また秋には台風が次々と接近・上陸したため、曇りや雨の日が多い秋となり、生産者の皆さまには大変ご苦労をされた年であったかと思えます。

さらに、熊本や鳥取で地震が相次ぎ、阿蘇山や桜島の噴火など自然災害の多い一年でした。

販売面では、前年からの影響で前進出荷で始まったため、年明けは過去にないほどの低調なスタートで販売価格も伸び悩みました。2 月以降は 1 月下旬の大寒波、大雪による品薄傾向で比較的安定した価格で推移したものの、5 月以降は全国的な気温高、開花前進で弱気な相場展開となりました。梅雨明けの 7 月 8 月では、高温乾燥による開花遅れとなった品目が多く、洋花を中心に苦戦しました。

本県産主要花きの植え付け時期にあたる 9 月には、極端な日照不足と多雨・高温であったことから、品質の低下や生育の遅れが発生し、切り花全般に品薄となったため堅調な相場で推移しました。

さて、日本国内の花き生産と消費は今から 20 年ほど前にピークに達した後、年々減少が続きました。ここ数年は下げ止まりの傾向も見られますが、かつての勢いを取り戻すには至っていないのが現状です。こうした花の消費低迷から脱却するためには、「和歌山の花の産地力とブランド力の向上」とともに、新たな花き需要の創出を進めていかなければなりません。

本会では、平成 26 年度から「国産花きイノベーション推進事業」を活用するとともに、『ココ・カラ。和歌山』の消費宣伝で「母の日参り」プロジェクトの全国展開や「いい夫婦の日」「フラワーバレンタイン」などの新たな花文化の提案を進めてきました。

また全国的レベルでは、「東京オリンピック・パラリンピック」におけるビクトリーブーケや会場周辺装飾を通じて、国産花きを内外にアピールする取り組みが本格化してきました。さらに、万国博覧会の誘致の動きも見られます。

こうした大型プロジェクトの開催が追い風となって、花き消費の活気が戻り、とりわけ花き産地和歌山が発展することを祈念して新年のご挨拶といたします。